

外国人と日本人とが、ともに豊かに生きる地域社会を!

ハロー フランス

ファイセック

FICEC

発行

ふじみの国際交流センター
Fujimino International Cultural Exchange Center

2012年 **6**月号(隔月刊) 第120号

国際フェスティバル

2012年5月19日(土) ふじみ野市東久保中央公園にて開催しました。
協力/ふじみ野市・富士見市・三芳町

金環日食より2日早く、スカイツリー開業3日前の5月19日、イオン前広場で国際フェスティバルを開催することができました。ふじみの国際交流センター開設以来15年目、私たちにとって文字通り世紀の大イベントでした。

バザー・舞台・売店・世界の服・本部など細かく担当を決め、それぞれの人が黙々と準備して下さる姿に何度感謝したかしれません。それに加えてふじみ野市・富士見市・三芳町と埼玉県警から協力を得られたことはありがたく心強く、NPO単独ではできなかったことを実現することができました。

食料自給率が40%の日本ですから外国を無視して生活することは不可能です。7月9日からは外国人も日本人と同じ住民基本台帳に登録されることになりま

す。顔も形も生活習慣も違うけれど、市民として支えあいながら暮らしていく時代になりました。そんな外国人と日本人が出会うためのフェスティバルでした。

「本当は地元のお祭りに参加したい」という、私たちの近くに暮らしながら今まで遠くの祭りに出店していた外国籍のひとたちの希望を叶えることができました。かつてふじみの国際交流センターで日本語を勉強したり悩み事相談に来た人が、売店を出したり元気に踊ってくれました。

協力してくださった方、今まで支えてくださった皆様に心からお礼を申し上げます。関東地方で金環日食が見られるのは300年後だそうです、できたら来年もこんな祭りができたらいいなと思います。

(理事長 石井 ナナエ)



コロンビアの民族舞踊チームのみなさん



埼玉県警ポッポくんとふじみ野市のふじみん

国際フェスティバル



【世界の料理】

今回、世界の料理に参加していただいた国は、韓国、フィリピン、コロンビア、トルコ、台湾、中国、タイ、スリランカ、チリ、インド、ブラジルの11カ国でした。みなさんフェスティバルの出店に慣れているようで、会場に到着にした後のセッティングの速いこと。あつという間に屋台の準備が出来上がり、お昼前には、もう、それぞれの屋台の前にはお客さんの列が出来ていました。そして、各国料理のおいしそうなおこと。スパイシーな料理あり、牛ステーキ枚挟んだ豪快なハンバーガーありと、カウンターにはそれぞれの国の料理や飲み物が並んでいました。お客さんも楽しそうに料理のコーナーを歩きながら、各国の名物料理を注文していました。



【世界の踊りと音楽】

シートを敷いただけの簡単な舞台であつたが、出演者は思い思いの華やかな衣装で、楽器の演奏や民族舞踊などが披露された。中には、小学生も参加していて大変可愛らしく、踊りは大人顔負けだった。また、日本からも埼玉県警音楽隊や和太鼓の演奏があり一層会場を盛り上げていた。イオンに近い事もあり、買い物帰りの家族づれなど、大変大勢の方に見に来ていただいた。



【世界の服】

16カ国・30着の服の展示をしました。そのうちの9着はスタッフが実際に着て、会場内を歩いて披露しました。その他の服は現地の方が着ている写真を添えて展示しました。韓国のチマチョゴリを見て「上着の丈はこんなに短かったのですね。」と驚かれる方、インドの服に触って「生地が涼しそうですね。」と言われる方。直接手にとって世界の服を見てもらうことができ良かったと思います。



【センターのお店】

本当にたくさんの方の協力で、わたあめ、ポップコーン、スーパーボールすくいも行列が出来るほど大盛況で当日は300名を越すお客様(特にちびっ子お客様)に来て頂くことができました！



トルコ料理、ケバブ



フィリピンの踊り



美しくカラフルな世界の服



大人気のスーパーボールすくい



【義援金コーナー】

日本大震災で被災した公民館を再建するための、「立ち上がろう！公民館」プロジェクトを支援する募金活動を行いました。ブースにはふじみの国際交流センターの設立者のひとりである首都大学東京・準教授の野元弘幸さんが終日参加し、バザーや野菜の販売を行いました。スタッフやボランティアの方々、新疆ウイグル地区からの留学生ツインさん、子ども学習広場の子どもたちなど協力して下さった皆さんのお陰で、素晴らしい募金活動ができました。

【来場者の声】

- ・お天気も良く、楽しい時間でした。見るだけでなくもっと交流が身近にできたらいいなと思いました。
- ・素晴らしいフェスティバルなのでもっと多くの人知らせてあげたい。
- ・いろいろな国の珍しい料理を食べました。もっと濃い味かと思ったが薄味で食べやすかった。
- ・定年後にはこのような活動にボランティアとして参加したい。



大勢の皆さまのご協力に感謝いたします フェスティバル実行委員長 山畑博子

国際フェスティバルが無事終了しました。これは、フェスティバルに参加して下さった大勢の地域の皆様方、料理を出したり踊りや演奏を披露したりして下さった沢山の皆様方、縁の下の力持ちとして私達を支えて下さった行政の皆様方、特別参加して下さった埼玉県警やパルシステムの皆様方、そして企画から運営まで力を貸して下さったスタッフの皆様方のおかげです。本当にありがとうございます。

何もかもが初めての経験で、どこから手をつけていいのか分からない状態から準備が始まりました。それにも拘わらず、こんなに大勢の皆様方の応援を得ることができました。これは、15年間この地に根をおろして、地道な活動を続けてきた「ふじみの国際交流センター」が、皆様に認められ、頼りにされて来た証かと思います。

今は、センターの活動から離れている方々もおられるかと思いますが、今まで活動に携わってこられた大勢の方々の努力が実っていることをお知らせ出来たことも、嬉しく思います。

フェスティバルの中心になる、料理や舞台に参加して下さる方々との交渉は、難しい面もありました。しかし当日は、屋台ではたくさんのおいしく珍しい料理を出して下さいました。また舞台では、前日まで一生懸命練習して参加して下さった皆様方もおられました。都内や、遠く横浜からも応援に駆けつけて下さった仲間もおられたと聞きました。

地域にこんなにたくさんの外国籍の人々が住んでいること、顔を合わせ触れ合えば、みな同じ楽しい仲間だということを実感して下さった方が大勢いれば、今回のフェスティバルは成功したと思います。ご協力ありがとうございました。

- 東日本大震災義援金「立ち上がろう！公民館」プロジェクトへ 計74,794円
募金30,294円（野菜の売り上げを含む）44,500円（バザー売上）
- センター活動資金として計上 計37,170円
（ポップコーン、わたあめ、スーパーボールの売上）
- センターのホームページ 国際フェスティバル当日の映像・写真をご覧いただけます。
<http://www.ficcc.jp/event/inf6.cgi?mode=main&no=70>

子どもと一緒に暮らしたい ……母国からの子の呼び寄せ

藤林 美穂

日本にいる親が母国にいる子を呼び寄せて一緒に暮らす、と聞くと、親子なら一緒に暮らすのは当然だろう、という気がします。実際にはなかなか大変なことです。

在留資格を得るための入管での手続きも結構大変なのですが、本当に大変な問題は、長く離れて暮らしていた親子が一緒に暮らすというまさにそのことにあります。

3月のとある朝、品川入管のカフェテリアで、私はフィリピン人の母子をずっと待っていました。このお母さんは日本で結婚して永住資格がとれたこともあって母国で親族に面倒をみてもらっていた子(18歳)を呼び寄せたのです。

その日は、「短期滞在」から安定した「定住者」の資格への変更許可をもらう日でした。本当は9時に会う約束だったのに、2人とも現れません。子が来たのは10時、母親が現れたのは11時…。子どもの来日以来相談に乗っていたのですが、途中から母子の仲が悪くなり、今はお互いに口もきかない状態なのです。在留資格のスタンプをパスポートに押ししてもらってうれしそうな子を尻目にお母さんが愚痴をこぼすのを、その後1時間にわたって聞く羽目になりました。

母親が日本にいて母国に仕送りしている場合、母親が日本でぎりぎりの生活をしていても、通貨格差のために母国にいる子どもたちは経済的には余裕のある生活を送ることが多く、お手伝いさんがついて子どもの面倒をみていることさえあります。お母さんの愛情を直接肌で感じられない一方で、蝶よ花よと甘やかされていることも多いのです。日本に来てみるとお母さんは昼も夜もなく働いて、誰もかまってくれない、面倒をみてくれ

ない、ということになりがちです。

また、フィリピンの場合、このケースのお母さんの世代(40代)だと子は親の言うことを聞いてあたりまえ(伝統的に年長者を敬う社会なので)、と思っていますが、若い世代はそうでもないようです。いろいろ命令されて嫌になる、ということもあるのかもしれない。

もうひとつ重要なのは、言葉の問題です。5～6歳で呼び寄せられた場合には、あつと言いう間に子どもたちは日本語を身につけていきますが、ティーンエイジャーになった子どもが日本語能力ゼロのまま日本に来ると、言葉の壁が四方に立ちふさがります。母が日本人と結婚していれば、家での会話は日本語が中心になります。学校に行くといっても、まったく日本語が話せない子を受け入れてくれる学校を探すのは大変です。結局、似たような境遇の行き場のない子どもたちが同国人同士で寄り集まって、極端に若い時期に結婚・出産したり、よくわからないまま犯罪の手先に使われたりということにもつながります。ここで言葉を覚えられるかどうかはその先の人生を決めると言っても言い過ぎではありません。今回は、彼らが日本語を学ぶための場所について書きたいと思います。

●筆者紹介

行政書士(ライフ行政書士事務所)。NGOで働いたり、フィリピン人支援団体でボランティアしたりした後、行政書士開業。毎日いろいろな国から来たいろいろな人の話を聞いて、「在日外国人」の多様性に、びっくりすることの連続です。

世界を駆け巡って出来る上がる翻訳の作業

西川力蔵

18歳まで神戸在住、中学卒業後日本で一番高い偏差値79を超える灘高校の近所の高校を卒業。役人は不向きと判断、大学卒業後会社員の道を選び、海外関係部門で約25年間勤務。2008年12月に帰国。2010年11月からふじみの国際交流センターの活動に参加し、「インフォメーションふじみの」の翻訳を手伝うようになりました。自分の翻訳レベルはまだ低いのですが、翻訳するにあたり次のことを心掛けています。

- ①日本語から英語に翻訳した後、その英語を基にスペイン語とフィリピン語に翻訳されます。英語の翻訳時間を短縮して、スペイン語やフィリピン語の翻訳時間を十分確保する。
 - ②特別な場合（行政の部署名等）以外は日本語をそのままローマ字表現にしないようにする。
 - ③簡単な英単語で平易な文章にする。
- 今まで翻訳した中で一番苦労したのは「キャラ弁」の

翻訳でした。（お弁当の中身をアニメやキャラクターの形に模したもの）。「キャラ弁」をそのままローマ字にせず、限られたスペースでの翻訳には本当に手を焼きました。失敗したことは昨年の在欧州時、自分のミスでパソコンを故障させ7月から9月まで全く翻訳が出来ず、取り纏めの方や他の人に迷惑をかけたことです。日本語のソフトウェアは日本ではどこでも入手可能ですが海外では入手困難です。パソコンがない自分がいかに無力であることをその時痛感しました。

スペイン語の翻訳に関して、自分の英語文章が米国に渡り、それを基にスペイン語に翻訳され再度日本に戻ってきます。情報が世界を駆け巡っているのが面白いと感じます。フィリピン語翻訳担当の人から英語の翻訳が早くて助かりますと言われ少しは役に立っているのだと感じました。拙い翻訳ですが、これからもできる限り続けていきたいと思っています。

見送りの三振より 空振りの三振

パートII

石井 ナナエ

日ごろから、外国ルーツの子どもたちの教育を危惧していた仲間7人で、多文化共生センター東京と荒川区立第9中学校夜間学級を視察した。多文化共生センター東京は2001年に日本語を母語としない親子のための高校進学ガイダンスを開催し、外国にルーツを持つ子供たちの学習支援教室をスタートした。メイン事業である「たぶんかフリースクール」は荒川区の協力によりJR常磐線三河島駅前の廃校を使って、週4日、3時間～6時間、定住資格を持っているが公立中学に入学できない年齢超過の子供たちを対象に「あいうえお」から始めて1年以内に高校受験ができるよう日本語や教科を教えている。

活動資金として、文科省の『夢の懸け橋教室』の委託を受けて2千万円、荒川区から年間3千万と教材費を補助してもらっている。授業料は、年齢超過者は1か月3万円、区内の中学生は2か月は無料、3か月目は夜の授業のみ無料となっていて、外資系企業から100万円もらい授業料が払えない生徒の補てんをしている。

59人の生徒を、30人の教員資格があり日本語教

師の免許もとった先生が教えている。代表の王さんが、「優秀な指導者が安心して仕事に全力を注げるようなシステムにしなければならない」と話していた。「FICECでこんなシステムができないかしら」と思った。

次に訪問した夜間中学は、日本国籍の帰国生徒の他に中国・フィリピン・韓国・ベトナムなど11か国の15～80歳の生徒42人が、中学卒業の資格を取るために5学級編成で17時半から21時半まで勉強していた。在留資格が定住・永住・家族滞在者で、都内在住か在勤の人だけが入学できるので、在校生の5分の1を占める埼玉県民は、まず都内にアルバイトを探したらしい。

アレルギーや宗教によって給食は代えてくれるが、問題を抱えている人が多くメンタル面の指導者がいないことを嘆いていた。また、年齢のギャップや経済的理由で夜間高校や3部制の高校に進学する人が半数で、在学中の仕事に卒業後も継続する人が多いらしい。生活ツールとしての日本語指導の大切さを強く感じた。

韓国の外国人支援団体を訪問

藤林 美穂

「韓国移住民健康協会」「プルン市民連帯」

3月7日から10日の4日間、短い間でしたが韓国に行って、外国人支援団体を訪問・見学してきました。そもそものきっかけは、昨年ふじみの国際交流センターにもたびたび来てくれた韓国人留学生の金ソナさんから、「韓国の外国人支援団体をぜひ見学してください！」と強くすすめられたことでした（ソナさんは日本と韓国の外国人支援の状況を比較研究した論文を書いています）。皆で誘い合わせ、石井さん、豊枝さん、山崎さんと私の4人で行くことになりました。

着いたその日はソナさんの案内でソウル観光、翌朝、外国人を対象にした医療支援を行っている団体、「韓国移住民健康協会」を訪ねました。事務局長の李愛蘭さんが活動について丁寧に説明してくれました。この団体では、外国人への医療サービスのために各地の病院や薬局とのネットワークを作っています。すでに9年この団体で働いている李さんご自身も看護師の資格を持っているそうです。ビザのない人も医療を安心して受けられるように、保険に似た独自のシステムを編み出して外国人支援を行っています（日本でも横浜の港町診療所など似たシステムを実施している所がありますが、残念ながら地域が限られています）。全国に42カ所の相談所があり、病院や薬局72カ所が協力体制にあるそうです。

李さんによれば、韓国政府は2008年に多文化支援法を制定し、韓国人と結婚して韓国に暮らす女性と子どもたちへ

の支援はかなり充実しているのですが、それは外国人が「韓国人になる」ことを前提とした支援で、結婚した外国人女性以外への支援はまだ足りない、とのことでした。この団体の財政は現在はほぼ企業の寄付によってまかなわれているそうです。

午後は、同じソウル市内にある「プルン市民連帯」を訪ねました。今回訪ねた団体のなかでは、ここが一番ふじみの国際交流センターと活動が似ていると感じました。事務局長のムンジョンソクさんと、外国人スタッフの女性たち（日本人の方もいました）に会いました。外国籍の女性への韓国語教育支援、外国人労働者相談などの他、日本の植民地時代に教育を受ける機会を逸してきた高齢の韓国人女性たちへの識字教育なども行っているそうです。ここでは、とくに12か国語の児童書7000冊をそろえたこども図書館が素晴らしいものでした。私たちが訪れたときも学校帰り子どもたちが絵本を読んでいた。

（次号へつづく）



プルン市民連帯の主宰する「多文化こども図書館」

活動報告

2012/4/2 携帯通訳者会議 10.24 スタッフ会議 15 イオンイエローシートキャンペーン贈呈式 16 携帯事務局会議 17 勉強会「価値観の多様性を考える」講師：埼玉県立大学・保科先生 24 情報誌編集会議 28 理事会 12.26 パソコン教室 月（毎週）英語教室 木（毎週）日本語教室 金（毎週）中国語教室 土（毎週）子どもクラブ

5/7 携帯通訳者会議 8 勉強会「NPOにおける広報の作り方」15 会計監査 15.29 スタッフ会議 19. 15周年記念国際フェスティバル 22 情報誌編集会議・スタッフ会議 28 携帯事務局会議 10・24 パソコン教室 月（毎週）英語教室 木（毎週）日本語教室 金（毎週）中国語教室 土（毎週）子どもクラブ

国際子どもクラブ進級お祝い会より

4月7日土曜日。今日は、子どもクラブの進級・進学お祝い会。月曜日からは新しい学校、新しい学年。喜びと不安の入り交ざった子供たち。子どもクラブで勉強してきた外国籍の子供たちとボランティアが集まった。数年前まで子どもクラブで勉強をしていた卒業生たちも集まってくれた。出身国は違うけれどお互いに情報交換。「あなたたちは、たくさんのボランティアの人に応援されています。そのことを忘れないで新しい学校生活を送ってください」と戸塚先生の贈る言葉。アートバルーンの体験、グループに分かれて日本語のゲーム、神経衰弱を楽しんだ後は、ボランティアの方々の手作り料理をいただいた。笑い声と笑顔のあふれた会になり、巣立っていく子供たちを送り出した。



【学習者の声】

日本語の勉強が楽しいです。いろいろな勉強をして日本語を良く話すことができるようになりました。一年間ありがとうございました。（中1、男子）

日本に来て1年、日本語が全くわからなかったけれども毎日勉強して日本語がわかるようになったし高校にも入りました。これからも楽しく勉強したいです。（高1、男子）

ふじみの国際交流センターの語学教室の紹介

お問い合わせ 049-256-4290

●中国語教室

日時：毎週金曜日 10時～12時 場所：ふじみの国際交流センター 料金：300円／1か月

当教室は国際交流活動の一助として行っています。語学習得だけではなく心の交流を目的としています。先生は、日本に住んでいる中国の方がボランティアで教えてくださるので、毎回必ず先生に教われるとは限りませんが、いつでも気軽にいらしてください。（担当：秋葉）

●西公民館英語教室

日時：毎週木曜日 ①19時～20時 ②20時～21時 場所：ふじみ野市西公民館

料金：4000円／1か月（4回） 担当：森

現在、高校生から社会人までが英会話の学習をしています。また年に数回、先生と食事会をして交流を深めています。見学もできますので興味のある方は是非見に来て下さい。

●日下エレナ英語教室

日時：毎週月曜日 12時45分～13時45分 場所：ふじみの国際交流センター 料金：1000円/1回

ロシア出身のエレナです。小さい時から英語を勉強し、ロシアで英語専科の大学を卒業しました。

10年前に日本に来てから、大人と小中学生に教えています。初心者から簡単な会話ができる人まで学習者の要望に合わせてレッスンをしています。見学者大歓迎！

センターの活動をご支援ください 会員・賛助会員・寄付のご案内

●活動を担う会員……正会員

正会員は、スタッフなどとして活動を担っていただく会員です。この会員は、総会などでの議決権をもちます。

年会費：個人1口 3,000円、団体1口 10,000円

●センターを財政的に支える会員……賛助会員

賛助会員は、センターを財政的に支えていただく会員です。総会等での議決権はありませんが、センターのイベントなどのご案内や、機関誌をお送りいたします。

年会費：個人1口 3,000円、団体1口 10,000円

会員、賛助会員にはこの機関誌をお送りします

郵便振替口座：00110-0-369511
口座名：ふじみの国際交流センター

外国人生活相談 無料

月曜日～金曜日 10:00～16:00

電話：049-269-6450

困っている外国人の方がおられたら
センターをご紹介ください。

ご寄付をいただいた方々

ご支援ありがとうございます

●2011年4月～（50音順・敬称略）

イオン(株)大井店、国際ソロプチミスト埼玉、立麻医院、東入間地区遊技業防犯協力会、穴沢エミリン、新井順子、荒田光男、石井ナナエ、市川孝治、岩田仁、上島直美、太田原裕、大西文行、葛西敦子、加藤久美子、金子忠弘、神田順子、木場ひろみ、駒形一夫、権田貴久子、菅原修二、鈴木譲二、武田和子、内藤忍、中嶋恵津子、長谷川正江、浜本由里子、百瀬紀子、森和也、森田信子、山畑博子



サービス料金表

ふじみの国際交流センターでは、センターの設備や、会員・スタッフの技能により、様々なサービスを行っております。ぜひ、ご利用ください。

種別	料金	対象
印刷機	マスター（製版代） 1枚100円 印刷代1枚1円	市民団体 個人
コピー機	1枚10円	
製本機	A4判1冊50円	
折り機	無料	

種別	内容	料金
講師派遣	国際理解教育	3,000円＋交通費
	外国料理教室	5,000円（材料費別途）
	語学教室	内容・予算に応じて相談
企画・運営	国際交流・国際理解に関するイベントや研修の企画・運営等	
編集・出版 ホームページ	多言語による情報誌・ガイドブック、ホームページの制作	1枚5,000円
	日本語によるチラシデザイン（A4判）	
翻訳	英語、中国語、韓国語、ポルトガル語、タガログ語、タイ語、ロシア語、ベトナム語	婚姻関係、ビザ申請、履歴書 A4判1頁、40字・30行 1枚1,000円
	その他の文書	A4判1頁、40字・20行 1枚3,000円より
通訳	英語、中国語、韓国語、ポルトガル語、タガログ語、タイ語、ロシア語、ベトナム語	半日5,000円より＋交通費

特定非営利活動法人ふじみの国際交流センター

〒356-0053 埼玉県ふじみ野市大井2-15-10

うれし野まちづくり会館2階

Tel：049-256-4290 Fax：049-256-4291

ボランティア活動に、ご参加ください

ふじみの国際交流センターでは、日本語指導をはじめ、外国籍市民との交流・手助けをするボランティアを募っています。ぜひ、電話またはホームページから、お気軽にご連絡ください。